



統計から社会の実情を読み取る

第34回 成人スキルの国際比較

本川 裕 | Honkawa Yutaka
アルファ社会科学株主席研究員

■東京大学農学部農業経済学科卒。財団国民経済研究協会常務理事研究部長を経て、現職。立教大学兼任講師。農業、地域、産業、開発援助などの調査研究に従事。現在は、ネット上で「社会実情データ図録」サイト（<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/>）を主宰するかたわら地域・企業調査等を行う。著作は「物流コストと日本の産業競争力」（学術誌『国民経済』、2004年）、『統計データはおもしろい！』（技術評論社、2010年）、『統計データが語る日本人の大きな誤解』（日本経済新聞出版社、2013年）等。



知力の高い日本人 ～読解力と数的思考力の国際比較～

OECDは、定期的に実施している子どもの国際学力テスト（PISA調査）と並んで、2011年に、大人の国際学力テストともいえる成人スキル調査（PIAAC調査）をはじめて実施した。この調査は、24か国・地域において、約15万7千人を対象に実施されたので、1国当たり平均では7,800人程度が対象だった。「日本の調査は2011年8月～12年2月に実施。16～65歳の男女1万1000人を住民基本台帳から無作為に選び、そのうち5,173人から回答を得た」（毎日新聞2013.10.9）。

成人スキル、すなわち仕事などの処理能力の評価を目的とし、テストは、読解力（リテラシー）と数的思考力（ニューメラシー）とIT活用力の3点にわたった。IT活用力は、チケットのネット予約を行えるかといったテストであり、個人の能力もさることながら、電話による予約などITを使わなくても便利な社会がそれなりに確立しているかどうかが影響するので、ここでは、最も基本的な「読み書きそろばん」、すなわち、読解力と数的思

考力の結果に限って取り上げるものとする。

成人スキルが調査対象であるとはいえ、持久力、器用さなどを含む総合能力ではなく知的判断力につながる面だけをテストしており、実際は、大人の頭のよさを調べる知力テストというべき内容となっている。そのためだろうが、「国の順位は皆気になるのか、ランキングが低かった米国をはじめ英国、ドイツ、スペイン、フランスとも重い空気でこのニュースを伝えている」（毎日新聞2013.10.17の坂村健氏の記事による）。私の推測では、OECDが知力調査と呼ばず、成人スキル調査と呼んでいるのは、調査目的による命名というだけでなく、成績が悪かった国への配慮が働いているからではなかろうか。

マスコミ報道では、各国の平均得点ランキング以外の内容は伝えられなかったので、ここでは、もう少し結果の全体像がうかがえるように、基本的なデータの中から、そのいくつかを紹介しよう。来月には、PISA調査の結果との対照や世代別結果を取り上げる予定である。

まず、平均得点の高い順に国を並べた結果を図

1に示したが、日本人が世界一の能力をもつことを示す得点であった。控え目で謙虚な日本人は、プラス面よりマイナス面・課題面の報道が習性となっているマスコミの影響もあって、余り得意になつたり、驕いだりしなかつたが、日本人が大いに自信を深めるに足る結果だったといえよう。

各国の結果をざっと概観すると、フィンランドが日本に次いで両方とも第2位となっており、また上位に、オランダ、ベルギー、スウェーデン、ノルウェーなど北欧やプロテスタン系ヨーロッパの国々が多い点が目立っている。

逆に下位の方には、フランス、スペイン、イタリアといったラテン系諸国が陣取っている点が目立っている。米国もどちらかというと低い方に属するといえる。

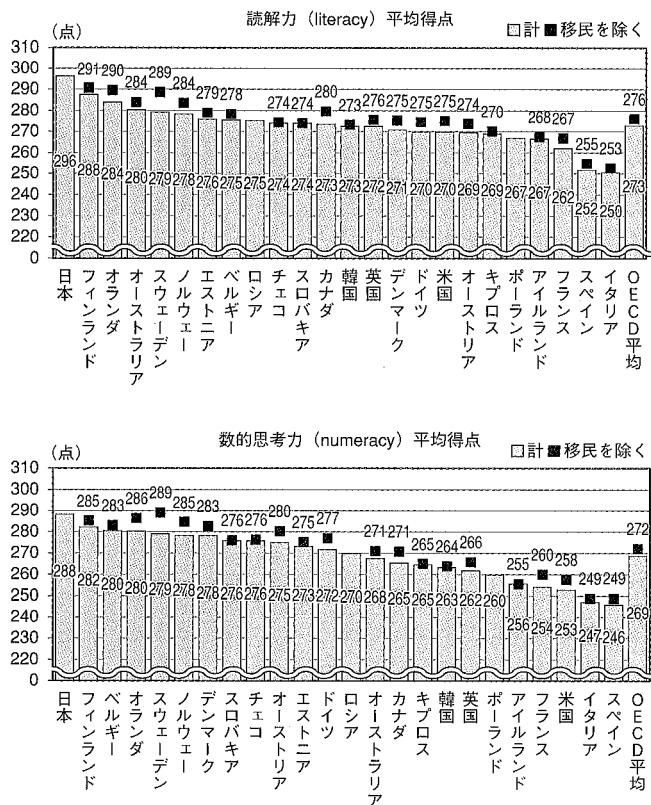
日本以外では、移民（外国生まれ）が占める割合が高い国が多い。自国生まれと移民では、平均して30点ぐらいの差が出ているので（OECD Skills Outlook 2013）、移民がほとんどない日本ではそれだけ得点が高くなっているという側面もある。欧米の場合、移民を除くと結

果がかなり違うという点は、誰でも気になることなので、移民を除いた平均点もグラフに付加することにした。読解力では、日本は相変わらず1位であるが、数的思考力では、移民を除くとスウェーデンに次ぐ第2位という結果である。移民の影響はこの程度だということが分かる。

知力格差の小さな日本 ～得点分布の国際比較～

次に、得点分布のばらつきがどの程度であるかを示すグラフを見てみよう（図2）。図は、得点の

図1 成人スキルの国際比較（2011年）



注) OECDが実施した「国際成人力調査（Survey of Adult Skills）」（略称PIAAC調査）の結果であり、対象は、OECDの参加国22か国とパートナー国2か国（キプロス、ロシア）、計24か国。ベルギーはフランドル地方、英国はイングランドと北アイルランドのみ。ロシアは集計が間に合わずモスクワ市民を除く。計には、日本（外国籍が調査対象外）、ポーランドを除き移民（外国生まれ）がかなり含まれる（例：スウェーデン17.5%、米国14.1%、ドイツ13.6%—Table B3.10）。

資料) OECD Skills Outlook 2013

低い方から並べて累積5%、25%、50%、75%、95%に当たる人の得点を示したものである。最下層といえる5%の人とトップ層といえる95%のとの得点差を折れ線グラフで同時に示している。

一見して、日本は、他国と比較して、全体に、上方に位置しているとともに、最下層とトップ層との間の得点差が小さいことが分かる。50パーセンタイル（中央値）だと1位の日本は2位のフィンランドを8点上回っているに過ぎないが、最下層だと2位のチェコを23点も上回っている。トッ

プ層の得点だけで比較すると日本より高い国はあるが、最下層の得点の高さはこのように抜けて世界一であり、こうした底上げされた均質性が、はじめに見た平均得点の高さにむすびついているのである。

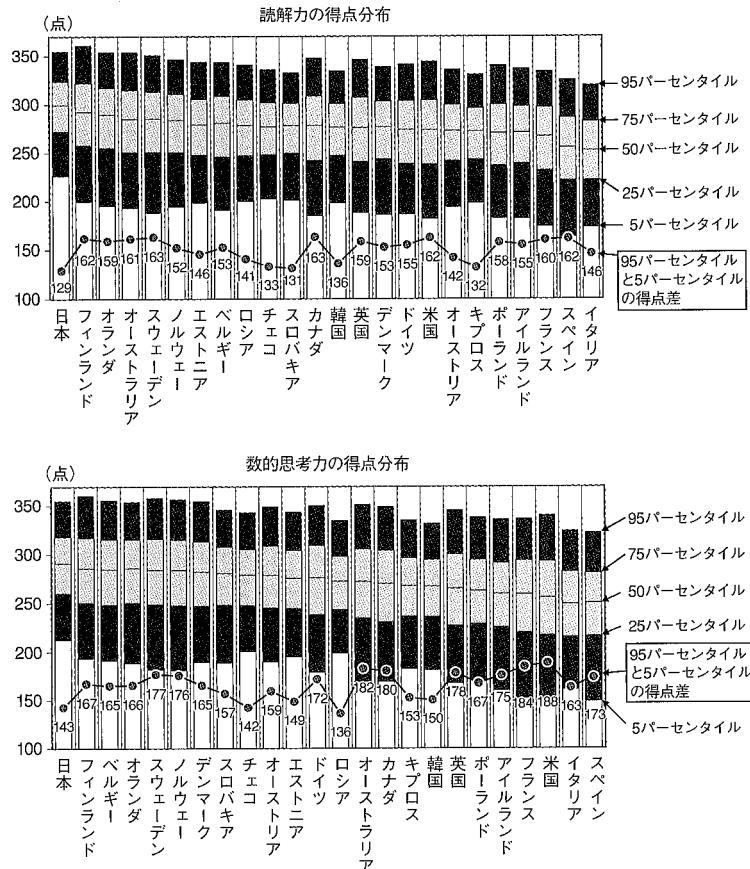
最下層とトップ層の得点差ランキングを表1に掲げたが、日本とは対照的に、米国などでは格差が大きいことがうかがえる。上記の坂村健氏記事によると、ニューヨーク・タイムズは「米国でスキルのある労働者が不足しているとしても、実際にはイノベーションが起こる活気のある経済だ。いったい何の問題がある?」などと書いているらしい。国の活力が、ノーベル賞受賞者数などともつながるトップ層の得点の高さによるものか、それとも末端までびきびしていることを示す最下層の得点の高さによるものかは、見方によるだろう。

階級差の小さな日本 ～親の学歴による影響の国際比較～

最後に、親の学歴が知力分布にどの程度影響しているかを示すデータから、各国で社会階層が固的となり階級差が生じているかどうかを見てみよう(図3、表2)。

日本の場合、両親が両方とも高卒未満の者は、読解力にせよ数的思考力にせよ、23か国中1位の高さとなっている。他方、どちらかが大卒以上の者の平均得点は、読解力で2位、数的思考力

図2 成人スキルの国際比較：得点分布(2011年)



注) OECDが実施した「国際成人力調査(Survey of Adult Skills)」(略称PIAAC調査)の結果であり、対象は、OECDの参加国22か国とパートナー国2か国(キプロス、ロシア)、計24か国。ベルギーはフランブル地方、英国はイングランドと北アイルランドのみ。ロシアは集計が間に合わずモスクワ市民を除く。国の順番は平均得点順。Nパーセンタイルは得点を下から並べてN%目の人の意味(50パーセンタイルが中央値)。

資料) OECD Skills Outlook 2013

表1 得点格差の小さい国・大きい国
(最下層 95 パーセンタイルとトップ層
パーセンタイルの得点差のランキング)

	格差の小さい国		格差の大きい国	
	読解力	数的思考力	読解力	数的思考力
1位	日本	ロシア	スウェーデン	米国
2位	スロバキア	チェコ	カナダ	フランス
3位	キプロス	日本	米国	オーストラリア
4位	チェコ	エストニア	フィンランド	カナダ
5位	韓国	韓国	スペイン	英国

で4位となっている。

また、親の学歴による得点差では、日本は読解力で4位、数的思考力で2位の小ささであり、日本の階級差は小さいと一般にいわれている点をデータ的に裏づける結果となっている。

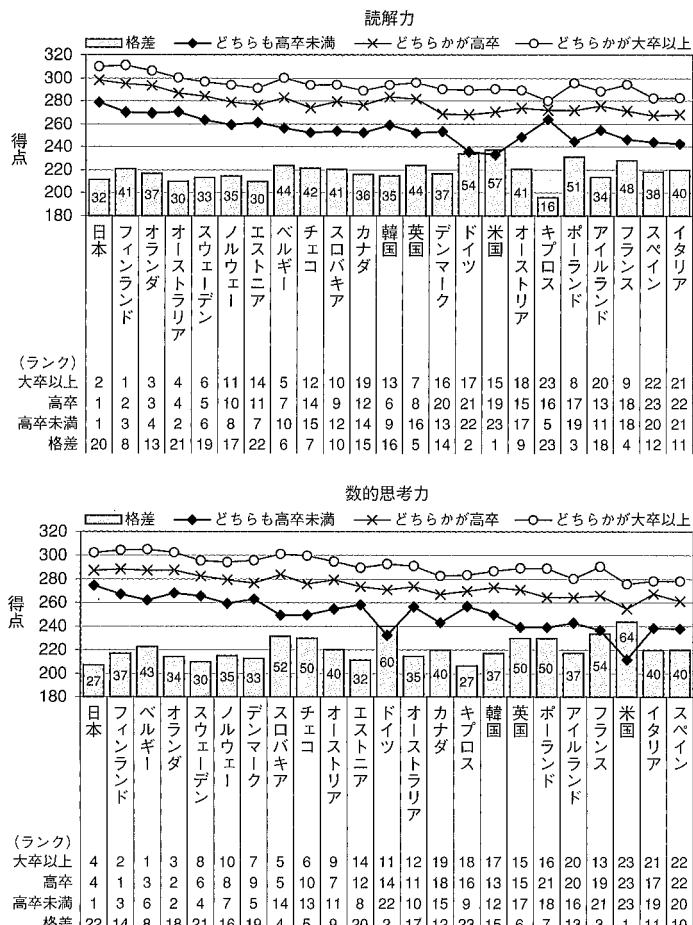
一方、米国とドイツは、両方の指標がいずれも、それぞれ、1位、2位の大きさになっており、社会階層の流動性が低く、階級差の固定化した国だとする評価は免れないだろう。

このように、成人スキル調査の結果を概観すると、日本の成人スキル、あるいは大人の知力は、平均値が世界一高いばかりでなく、個人間の格差が小さい点、また、世代間の格差の再生産の程度が低い点でも世界の中で目立った存在である。都市国家であるならざ知らず、人口1億人以上の大国でどうしてこんなことが可能なのかは、世界の人にとって驚異なのではなかろうか。日本人にとってまことに誇らしい結果であることを素直に喜ぶとともに、これは、どういう要因でもたらされた結果なのか、また、日本の経済社会の安定性、成長性に本当につながっているのか、あるいは、見逃している盲点はないのか、などについて、さらに立ち入った検討を加えていく必要があるだろう。

*「社会実情データ図録」関連図録

[1] 図録 3936 「世界一頭がいい日本人（OECDの成人スキル調査）」

図3 社会階級は固定的か：成人スキルに対する両親の学歴の影響度（2011年）



注) OECDが実施した「国際成人力調査(Survey of Adult Skills)」(略称PIAAC調査)の結果であり、対象は、OECDの参加国22か国とパートナー国2か国(キプロス、ロシア)、計24か国。ベルギーはフランドル地方、英国はイングランドと北アイルランドのみ。ロシアは学歴集計なしのため除外。国の順番は計の平均得点順。

資料) OECD Skills Outlook 2013

表2 親の学歴による得点差で測った階級差の小さい国・大きい国
(両親が両方とも高卒未満とどちらかが大卒以上の得点差)

	階級差の小さい国		階級差の大きい国	
	読解力	数的思考力	読解力	数的思考力
1位	キプロス	キプロス	米国	米国
2位	エストニア	日本	ドイツ	ドイツ
3位	オーストラリア	スウェーデン	ポーランド	フランス
4位	日本	エストニア	フランス	スロバキア
5位	ベルギー	デンマーク	英国	チェコ